

[研究ノート]

T・H・ハクスリーの宗教信仰

—どこに見いだすべきか—*

藤 田 祐

ハクスリーが自分自身の自然主義思想と比較するための参照枠として宗教を筋道立てて頻繁に利用するのは、嘲る英雄の見事な装いで聖俗を並立するのに役立つ、嘲笑の道具となるレトリックであったということも心に留めておかねばならない。(Paradis, “Victorian Context” 16)

客観性は宗教的思考の枠組みに属する。デカルトのジレンマは神を源とする権威が「消失する」地点で最も激しいものとなる。ゆえに、ナチュラリストは戦略として内実抜きに宗教言語の構造を採用することになる。(Levine, “Scientific Discourse” 250)

I はじめに

ヴィクトリア時代を代表する科学者で高等教育や成人教育の場で科学教育に携わった生物学者のT・H・ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-95) は、宗教対科学という対立軸で科学を体現する人物だと考えられてきた。今でもハクスリーについての概説や科学と宗教の関係についての概説では、1860年にオックスフォードで開催されたイギリス科学振興協会におけるオックスフォード主教サミュエル・ウィルバーフォースとの対決に焦点が当てられる(垂水 118-20; Dixon 73-76)。科学と宗教の対決を象徴する出来事として取り上げ続けられてきているものの、その意味づけは見直しも進んでいる(Lucas; Jensen ch. 3; see also Bowler 185)。同時に、ハクスリー自身のキャリアや思想が宗教とどのような関係にあるのかも検討されてきた。当てこすりとは言え、ハクスリーに「教皇」という称号が付された事例もあり(Anonymous [Hutton])、またハクスリー自身も、「原罪」などキリスト教の概念を用いるなど(T. H. Huxley, “Prolegomena” 27)、宗教の言葉づかいを援用しながら自らの思想を展開している。このようなハクスリーの活動や思想に表れる宗教性をどのように解釈すべきかという問題が研究されてきた。

ハクスリーの宗教への言及を、冒頭に引用した通り、J・G・パラディスは、「嘲笑」するための「レトリック」とみなし、宗教の言葉づかいを含むハクスリーの議論を文字通り受け取ること

への警鐘を鳴らしている。冒頭の引用は、ハクスリーが晩年にオックスフォードで行ったローニズ講演とその序文として書かれた「プロレゴメナ」を収録した書籍の解説論文における議論で、ハクスリーが中産階級の正統信仰となる新しい「三位一体」を含む宗教を打ち立てたというバーナード・ライトマンの研究に対して論評した部分である (Paradis, “Victorian Context” 16)。一方、ジョージ・レヴァインは、ハクスリーを中心とする自然主義者が抱えるジレンマに注目することで、自然主義の言説が宗教性を抱え込まずをえない構造を明らかにしている。レヴァインによれば、経験科学の方法に基づいて客観的な自然法則を探究するという〈科学的自然主義〉 (scientific naturalism) 自体の根拠は〈科学的自然主義〉の方法によっては正当化されない。因果法則に基づく自然を支える根拠としての神なき〈科学的自然主義〉は、主客の分離がはらむ「デカルトのジレンマ」に陥り、自らの世界観を正当化するために宗教の言説に訴えることになるというわけである (Levine, “Scientific Discourse”; see also Levine, “Paradox”)。ハクスリーの言説に表れる宗教性やハクスリーによる宗教の言葉づかいをどこまで真に受けてよいのかを含めてハクスリーの思想を読み解く必要がある。

ハクスリーの宗教性への着目は、ヴィクトリア時代の宗教をめぐる研究の見直しとパラレルな関係にある。ダーウィン進化理論をめぐる再浮上した科学対宗教という対立図式自体も、ハクスリーを含む科学の側が宗教を敵として自らの権威を高めるために打ち立てたものだという再解釈が行われてきた (See Moore, *Post-Darwinian Controversies*)。また、人々の生活や社会の中心を占めていた宗教がヴィクトリア時代を通じて力を失っていったという世俗化テーゼも見直されてきた。科学技術の発展を通じていわゆる啓蒙が進んだ側面がある一方で、ヴィクトリア時代は、宗教が人々に浸透していく時代とも、少なくとも教会が布教や教育を推し進めていく時代とも捉えられる。信者獲得だけでなく宗教論争という場でも各宗派間の競争が熾烈になった時代とも捉えられるのだ (Turner, *Contesting* ch. 1)。産業化の時代に農村から都市に流れ込んだ労働者層やアイルランドからブリテン島に移住してきたカトリックなどに対する教会の活動が (See Chadwick 1:325-526)、結果として宗教と教会組織を通じて人々を社会に統合していく役割を担うことになった。長期的な観点からはヴィクトリア時代に世俗化が進んだと言えるものの、移行期であるがゆえに、宗教から世俗へという単純な近代化モデルでは取りこぼされる複雑な様相を呈していることが、これまでの研究で明らかにされてきた (Turner, *Contesting* ch. 1; see also Moore, *Post-Darwinian Controversies*; M. Stanley, “Uniformity”)。この研究の進展と並行して科学を体現する人物というハクスリーの人物像も見直されてきたのである。

以上の観点を前提にして、どこにハクスリーの宗教信仰を見いだすべきかという論点を先行研究に基づいて明確化することを目指す。以下では、伝記的研究、公人としてのキャリア、〈新しい宗教改革〉 (New Reformation)、世界観という四つの観点からハクスリーの人生や言動に表れる宗教性の分析を整理していく。ある人物の宗教信仰を再構成するという学術研究は一直線の平坦な道ではない。様々なルートから接近することで多角的に明らかにすべき事柄である。

II 伝記的研究——育ちと家族関係

ハクスリーの宗教信仰を考える観点としてハクスリーの人生に注目するという伝記的なアプローチがある。このアプローチで用いられる資料としては、ハクスリーの手紙などの個人文書があり、19世紀に息子レナードの編集によって出版された『人生&書簡集』に加えて(L. Huxley)、ハクスリーが教鞭をとっていた高等教育機関を引き継いだロンドンのインペリアル・コレッジに様々な一次資料が収蔵されているアーカイブがある。このような一次資料を網羅した決定的な研究がエイドリアン・デズモンドによる評伝である。ここでは、私生活と公人としての活動に分けて考えることにする。ハクスリーの私生活に注目するアプローチとしては、ハクスリーの育ちに注目するものだけでなく、婚約期間も含めて妻のヘンリエッタとの関係を中心として家族に注目する研究がある。公人としてのハクスリーの活動は多岐にわたるため、宗教信仰を探究するアプローチも多様でありうるが、この点については後述する。

ハクスリーの育ちという点から考えると、当時のイングランドにおける下層中産階級出身として標準的な点もあれば特異な点もある。トマス・ヘンリー・ハクスリーは1825年にロンドン近郊のイーリングで生まれた。父親は福音主義傾向の国教会系学校で数学教員を務め、母親はロンドン出身で高教会信仰のバックグラウンドがあった。ハクスリーが学校教育を受けたのは父親の勤めるイーリング校に通った2年間だけであるが、デズモンドによれば、福音主義に基づく学校教育という原体験は人生にも少なからぬ影響を与えたようである。ハクスリーが通っていた頃のイーリング校は没落してつぶれかけており、父のジョージは故郷のコヴェントリーに戻って新しい事業を始めることにする。しかし、貯蓄銀行という父親の新規事業はうまく行かず、トマス少年は学校にも通わせてもらえずに貧しい生活を送ることになるが、コヴェントリーでの少年時代に書籍を通じて科学の世界にのめり込むことになる。経済的には貧しいにも関わらず、父親が教育者だったのもあって知にふれることのできる環境で育ったのである。デズモンドによれば、ジェイムズ・ハットンの地質学理論を学んだりカーライルの思想に触れたりすることを通じて、トマス少年は両親の正統信仰に疑問を抱き始めた。また、非国教派の信仰が広がっていたミッドランドにあるコヴェントリーで非国教派の思想に触れることにもなり、特に、聖職者と知り合ったり書籍から学んだりすることでユニテリアン派の理性主義キリスト教信仰に触れることになった(Desmond, "Huxley"; see also Desmond, *Devil's Disciple*)。

このような少年時代を送ったハクスリーは、外科医という進路を歩みながら、結果として生物学の研究に従事するようになり、ヴィクトリア時代を代表する科学者へと昇り詰めることになる。トマス少年は、姉二人の結婚相手が外科医だったという家庭環境もあって、当時は職人とはほぼ同一視されていた外科医になるべく職人と同じような徒弟修業に入る。十代半ばで姉家族とともにロンドンに移ったハクスリーは、医学専門学校で学び、1842年10月には兄ジェイムズとともに新設されたチャーリング・クロス病院の医学校で授業料を払わずに学べる奨学金を獲得する。

医学の専門教育を受けながら当時最先端の生理学や解剖学を学び、科学研究への道を歩み始めることになる。修了後のハクスリーは基準年齢に達していなかったために所定の免許を取得できず、ヴィクトリア時代に活躍した他のナチュラリストと同様に海軍の測量船に同乗し、外科助手として勤務する傍らで自らの科学研究を進めていくことになる。1846年から1850年まで主にオーストラリア周辺を航海したラトルスネーク号で働いていたハクスリーは、シドニーで将来の結婚相手ヘンリエッタ・ヒーソーンに出会う。生活が安定してから結婚すると約束したものの、当時は有給の教育研究職が非常に限られていたため、1850年に帰国した後もしばらく生活が安定しなかった。1854年になってようやく鉱山学校で自然史と古生物学を教えるポストに就任し、翌年ヘンリエッタをロンドンに呼び寄せて結婚生活を始めることになる(Desmond, “Huxley”; see also Desmond, *Devil's Disciple*)。ここから公人としてのハクスリーの様々な活動が亡くなる直前まで続くことになる。

ハクスリーの宗教信仰を考える上で参照点となるのが、ヘンリエッタとの関係および家族との家庭生活である。ハクスリーが後に結婚するヘンリエッタとシドニーで出会ったのは1847年の7月で、間もなく婚約したものの結婚する1855年7月まで8年の婚約期間を経ることになった。この間にロンドンとシドニーの間でやり取りした手紙、および日々の生活を記した記録は、ハクスリーの宗教信仰を探る鍵を提供する。この点に注目した代表的な研究が、ポール・ホワイトによるものである(White, “Genius”; *Thomas Huxley* esp. ch. 1)。ホワイトは、婚約期間における文通が両者のアイデンティティを形成するのに重要な役割を果たしたと論じている。この過程を通じて、後に〈科学人〉(man of science) という公人として社会で活躍するハクスリーの基盤が形成され、ヘンリエッタにとっても家庭という場でハクスリーの公的な活動を支える基礎となるアイデンティティが確立されることになった。ホワイトの研究によれば、ハクスリーとヘンリエッタとの関係、およびハクスリー家の家庭生活は、〈科学人〉という公人の私的領域という点で、公私と男女との区別が重ねられるヴィクトリア時代の規範を考察する重要な観点を示唆している。このようなジェンダー化された両者の役割分担は、ホワイトによれば、最初から確立されていたり一方的に押し付けられたりしたものというよりは、二人のコミュニケーションによる「交渉」を通じて形成されたものである。ホワイトは、1848年2月の手紙を引用した直後に宗教の言葉づかいでまとめている。

ここでハクスリーはヴィクトリア時代の仕事と家庭——前者は他者の感情を配慮せず
に個人として立ち向かう試練 (trial) と贖罪 (atonement) の場で、後者は共感と情愛に
支配された救済 (salvation) の場——という象徴レベルの秩序に参入することを説明し
た。(White, *Thomas Huxley* 19; see also White, “Genius” 232)

ヘンリエッタの家庭における役割も、神に与えられた使命と捉えられていたが、信仰に支えられ

た家庭における女性の奉仕は、ヴィクトリア時代の道徳的価値としてありふれたものだった。このような家庭に支えられた〈科学人〉として公的活動も、宗教に支えられていた公私の区別に拠っているという点で宗教性を帯びてくるというのが、ホワイトの研究から得られる知見である。また、ハクスリーは自らの宗教的な懷疑を率直にヘンリエッタに伝えて書簡のやり取りでも宗教信仰について話題にしており、正統信仰に対して懷疑や批判を向ける男性知識人の家族関係という観点からもハクスリーの家族関係は重要である。教会や神学に対してするどい批判を向ける言論活動を行ったハクスリーは、子供たちを母親の信仰を受け継ぐ国教会信徒として育てることにした (L. Huxley 1:322-23; see also Turner, *Contesting* 97)。また、家庭における不幸という問題も、ヴィクトリア時代における知識人の信仰を考える上で重要な要素である。1860年に幼くして亡くなった長男ノエルの存在と、画家のジョン・コリアと結婚しながら1887年に亡くなった次女マリ안의悲劇は、ハクスリーの宗教信仰を考える上で大きな意味を持つ出来事と考えられている (White, *Thomas Huxley* 114-21; Paradis, "Victorian Context" 22)。

ヴィクトリア時代においては知識人同士の文通は公的な活動の一環であり、公人の手紙は後々出版されることが前提になっていたとは言え、友人とやり取りした私信には公的な活動には表れない知識人の私的な側面が表れ出るものであった。例えば、後の研究者がハクスリーの信仰を表す際に言及する「科学的カルヴァン主義」(scientific Calvinism) は、ハクスリーが懇意にしていた内科医のフレデリック・ダイスターへの手紙でハクスリーが用いた表現である。ハクスリーは「私の意図は(中略)苦痛があらゆるところに存在するのは避けがたいことを示すことであって、故に他の避けがたく起こる物事と同様だということである」と述べた後で、自分の立場を表すのに「科学的カルヴァン主義」という言葉を用いている (L. Huxley 1:164)。また、1860年前後から手紙のやり取りをしていたチャールズ・キングズリーとは、1860年12月に生後4年で亡くなった長男ノエルの死をきっかけに神、自然、人間の生死などキリスト教の世界観について書簡で意見交換をしている (White, *Thomas Huxley* 114-21; see also Irvine 127-34)。その中でハクスリーは、「神の統治全体(中略)が正当であるという最も確固とした信念がある。(中略)。人間の行為とその報償との間の一見したところある齟齬を考えると、〈自然〉が私たちよりも正当であることが想起される」(L. Huxley 1:316-17) と自らの世界観を表明している。このように、ハクスリーも私信においては、公的な言論活動では述べられないような自らの宗教信仰を明らかにしているのである。

以上のように、残された書簡や日記などから育ちや家族関係という私生活に焦点を合わせてハクスリーの人生を再構成することでハクスリーの宗教信仰に迫るというアプローチの研究がなされてきた。しかしながら、以上のアプローチが、以下でとりあげるハクスリーの公人としてのキャリアや言論活動を分析するアプローチよりも深く掘り下げられた本質に迫る研究というわけではない。ハクスリーのキャリアや言論活動にこそハクスリーの宗教信仰が表れ出ているという見方も可能だからである。

III 公人としてのキャリア

ハクスリーの公人としてのキャリアは、まさにヴィクトリア時代における科学(者)の専門(職)化を体現するという点で、学術研究において注目されてきた。少年時代の貧しい生活から自ら努力を重ねて知識を身に付けることで、知を生活の糧とする教育研究職に就いて社会階層の上昇を果たし、言論活動を行ったり行政機関の職務に従事したりして最終的には枢密院の顧問官まで昇り詰めたからである。また、ハクスリーのキャリアは、公的資金で運営される教育研究機関で専門知識を身に付けたプロの科学者が教育研究に従事するという新しい科学研究と科学教育を自ら実践することで、新しい制度を確立していく過程とみなすこともできる。それは、キリスト教と結びついた自然神学に基づく科学研究、専門知識ではなくパトロネージという人と人とのつながりで遂行される科学研究、豊かな経済基盤をもつジェントルマンしか専念できない趣味として行われる科学研究、非国教派を排除したオックスブリッジにおける教育研究など、19世紀前半までのイギリスにおける国教会制度と結びついた身分制社会に根ざした科学研究を崩していく過程でもあった。このような古い制度を壊して科学(者)の専門(職)化を成し遂げたハクスリーのキャリアを支えていた要素としてハクスリーの宗教信仰を分析するという視覚が可能である。

このようなハクスリーのキャリアを〈科学人〉という理念と結びつけて〈科学人〉というアイデンティティの確立(と動揺)という観点から分析する研究が、ホワイトのモノグラフである。ホワイトは、先に言及した結婚相手のヘンリエッタとの関係を含めた家庭生活、パトロネージで結びついていたジェントルマンの科学研究との対決、科学教育を含んだ「文化としての科学」という観点、「科学崇拜」と聖職としての科学者という観点、帝国と技術教育という観点からみた労働者との関係など、様々な分析視覚から〈科学人〉の理念を枠づける。道徳性と社会的責任を求められる〈科学人〉という理念は、真理への信仰と科学研究という天命というような宗教信仰に支えられた理念とみなすことが可能で、ホワイトの研究においても〈科学人〉というハクスリーのアイデンティティが帯びる宗教性が強調されている(White, *Thomas Huxley*)。この点は、若きハクスリーが強い影響を受けたと言われているカーライルの〈英雄〉という理念と結びつけて解釈することもできる(Paradis, *T. H. Huxley*, ch. 2; see also Turner, “Thomas Carlyle”)。科学者に求められる道徳性という観点は、自然科学研究に求められるようになった客観性という理念と結びつけることもできるかもしれない。ダストンとギャリソンによる〈客観性〉という概念の歴史研究では、専門科学の確立期である19世紀半ばから後半に求められた〈機械的客観性〉に対応する認識枠組規範(epistemic virtue)が要請したのは、客観的な科学を実践するために主体的な意志の力で主観性を抑圧することだったと論じられている(Daston and Galison ch. 4)。このような禁欲的な道徳性を求める科学研究を、〈科学人〉の理念やハクスリーのキャリアだけでなく、人為的な良心によって自然の利己性を抑制するという「進化と倫理」で展開されたハクスリーの人間観・倫理観と結びつけることができるかもしれない(See T. H. Huxley “Prolegomena”)。このような道

徳性を発揮して社会的責任を果たすという〈科学人〉の理念を体現したハクスリーのキャリアに宗教性を見いだすことができるのである。

公人としてのキャリアからハクスリーの宗教信仰を考えるもう一つのアプローチとして、ハクスリーが自らの教育論に基づいて教育行政や教育現場で果たした役割に注目する研究がある。ヴィクトリア時代中期は身分に基づく社会から知識や能力に基づく社会への移行期として位置づけられ、公教育をどのように推進していくべきか、初等教育から高等教育までの各段階でどのような内容が教えられるべきか、幅広い議論が展開されていた。ハクスリー自身は本務である高等教育機関での教育だけでなく労働者向けの成人教育も積極的に行い、さらには1870年のフォスター教育法で教育行政を担う教育委員に選ばれたのを初めとして教育行政や学校運営にも関わっていく。元々は教会が初等教育を担っていたイングランドでは、工業化と都市化の進展に伴って各教会が布教だけでなく教育の振興も進め、同時に補助金というかたちで公権力による教育行政も進められていった。教会と分かちがたく結びついていた初等教育を新しい公教育制度に包摂するに当たって、聖書に基づく宗教教育を公立学校でどのように施すのかは、国教会と非国教会の利害対立とも絡み合って大問題となった（Chadwick 2:299-308）。このようなコンテキストで教育行政に関わることになったハクスリーは、科学教育や技術教育の振興を主張すると同時に、聖書を公教育の場で用いることを容認する。科学研究から神学を切り離して科学研究に対する教会の介入を排除するという〈科学的自然主義〉との整合性が問題になるが、ハクスリーが自らの立場を「科学的自然主義」と位置づけた1892年の『いくつかの論争点に関する論集』へのプロローグでは、聖書をマグナ・カルタに準えて一貫して教育の現場で利用することを擁護してきたと述べている（T. H. Huxley, Prologue 51-53; see also M. Stanley, *Huxley's Church* ch. 5）。ハクスリーによる聖書の擁護は、ハクスリーが攻撃したのはあくまで自然科学研究と相いれない神学であって宗教そのものではないという研究とも整合する（See Barton）。さらに、成人教育の現場などで講義するハクスリーは、あたかも信徒に科学という新しい宗教を説教する聖職者のように捉えられた。このような観点から、同時代には当てこすりで「教皇ハクスリー」という呼称が授けられ（See Anonymous [Hutton]）、現在でも「ハクスリーの教会」をタイトルに含む研究が出版されて結論で現代社会が「ハクスリーの教会」に準えられている（See M. Stanley, *Huxley's Church*）。また、ハクスリーの講演録が『平信徒による説教』（*Lay Sermons*）というタイトルで出版されたことも象徴的である（T. H. Huxley, *Lay Sermons*）。ハクスリー自身が自らの宗教的なイメージを利用してたと解釈することも可能だろう。以上のように、教育行政や教育現場でのハクスリーの活動からハクスリーの宗教信仰に接近するという道も開けているのである。

IV 新しい宗教改革——不可知論と科学的自然主義

グラッドストーンなどの論敵への批判を含む宗教論と科学論を収めたハクスリー晩年の著作

『いくつかの論争点に関する論集』へのプロローグでは、先に述べたように自らの「科学的自然主義」の立場を明確化し、文明と科学の歴史を〈自然〉から〈超自然〉を排除していく過程と説明している。またハクスリーは文明の歴史における宗教改革の意義を強調し、自らの「科学的自然主義」を宗教改革の延長線上に位置づけている。ハクスリーによれば、宗教改革は理性を解放してカトリック教会に対する思想の自由を確立したのだ (T. H. Huxley, Prologue)。ハクスリーは、「実際に、プロテスタンティズムを論理的に展開すれば、必ず聖書の權威は〈理性〉の足下にひれ伏すことになり、寛容主義や合理主義の神学者によって、聖書の専制は極度に制限された君主制に急転換した」と述べ、聖書より理性が優越することを宣言している (T. H. Huxley, Prologue 10)。以上のように、ハクスリー自身が自らの思想をプロテスタンティズムと結びつけている点をふまえて、以下ではプロテスタンティズムという宗教信仰の延長線上に展開されたハクスリーの理念を検討する。

ハクスリーのキャリアを非国教派プロテスタントの解放闘争の一環として捉えた研究が、先に言及したデズモンドによるハクスリーの評伝である。下層中産階級から知を武器に階級上昇を果たしたハクスリーのキャリアは、国教会の聖職者と地主階級を中心とする富裕層に独占されていた科学の世界に風穴を開けるものだったと解釈できる。デズモンドによる評伝の特色は、国教会制度に支えられていた身分社会から知識と能力を軸とするメリトクラシーに基づく産業社会への移行を非国教派プロテスタントによる〈新しい宗教改革〉と解釈する点にある (Desmond, *Devil's Disciple; Evolution's High Priest*)。デズモンドによれば、「良心の自由を限界まで突き詰め」という意味で、ハクスリーが唱えた〈不可知論〉(agnosticism) は「非国教派の極致」であり「プロテスタントによる宗教改革の駄目押し」であった。また、ハクスリーの「新しい宗教改革」は「工業と専門職の階級を解放することと同義だった」ともデズモンドは述べている (Desmond, *Evolution's High Priest* 243)。ハクスリーが担った〈新しい宗教改革〉は、カトリック教会の支配に対して抗議した〈宗教改革〉に対して、国教会の支配に対して産業社会の中核を担う専門職階層が抗議した非国教派の解放運動だったというのが、デズモンドのテーゼである。ハクスリーが目指したのは、自然科学も含めた学術を担う国教会聖職者という知識エリート階級を、自然主義に基づく科学研究を担う専門職の科学者という新しい知識エリート階級に置き換えることだった。教会や神学の科学研究への介入に対するダーウィン進化論の擁護、〈不可知論〉、〈科学的自然主義〉、科学教育と技術教育の振興など、ハクスリーの思想や活動が非国教派の解放を求める「新しい宗教改革」という文脈で説明できるのである。

デズモンドがプロテスタンティズムの延長線上で解釈したハクスリーの理念からハクスリーの宗教信仰に迫ることも可能である。ハクスリー自身も自ら提唱した〈不可知論〉の原理を宗教改革の原理と結びつけている。

不可知論は、実際のところ信条ではなく方法であり、その本質はある一つの原理を厳

格に適用するところにある。その原理はかなり古くからあり、ソクラテスと同じくらい古く、「すべてのものを識別して、良いものを守り」と記した著者と同じくらい古い。それは、宗教改革の原理であり、あらゆる人が自分の内にある信仰を根拠づけることができるようにすべきだという公準を示しているにすぎない。それは、デカルトの偉大な原理であり、近代科学の根本的な公準である。肯定の命令では、知性の対象となる事柄については、他に何も考慮しなくても導かれる限り自分の理性に従いなさいという原理として表現される。否定の命令では、知性の対象となる事柄については、論証されたり論証可能であったりしない結論を確実であるというふりをしてはならないという原理として表現される。(T. H. Huxley, "Agnosticism" 245-46)

ただし、引用の最初で述べられている通り、〈不可知論〉は「信条」ではなく「方法」なので、単純に宗教信条と同一視することはできない。

しかしながら、ハクスリー研究において、〈不可知論〉や〈科学的自然主義〉などハクスリーが提起した理念に宗教性を見いだして、ハクスリーの思想や活動を〈代替宗教〉(alternative religion)と捉える議論も見られる。その代表である古典的な研究が、「はじめに」でも言及した、バーナード・ライトマンによる〈不可知論〉の起源をめぐる研究である。ライトマンは、ハクスリーが「普遍的な因果法則」「自然の斉一性」「客観的な外界としての自然界」という新しい三位一体論を核とする「不可知論」の教義を確立したと論じている(Lightman, *Origins*)。「はじめに」で確認したように、「進化と倫理」の序文として書かれたハクスリー論でパラディスは、「ハクスリーが、中産階級が正統信仰とする一まとまりの教義を科学の正統信仰という別の教義で置き換えることで、「三位一体」を完備する新しい「宗教」を定式化している」とライトマンの議論をまとめ、さらにハクスリーの定式化した新宗教が既存体制を擁護する神学上の神義論を世俗の神義論に置き換えた」とライトマンが論じている点を批判している(Paradis, "Victorian Context" 16)。冒頭で引用したパラディスの警鐘は、ライトマンの議論を紹介している(節の最終)段落の末尾に書かれている文である。またライトマンが「三位一体」としているのは、まさに冒頭で紹介したレヴァインが自然主義に基づく科学研究が拠って立つ大前提あるいは公理としているものである。レヴァインによれば、自然主義科学の方法論では正当化できないがゆえに、宗教的な言葉づかいで正当化されざるをえない考え方なのだ(Levine, "Scientific Discourse"; see also Levine, "Paradox")。宗教や神学に対して自然科学を擁護する武器となる〈不可知論〉は、まさに宗教に対する武器となるがゆえに宗教性を帯びざるをえないのである。

〈不可知論〉と並んでハクスリーの理念を表す概念が〈科学的自然主義〉である。先に述べたように、ハクスリーが自分の立場を「科学的自然主義」と呼んだのは晩年の1892年に書かれた『いくつかの論争点に関する論集』へのプロローグであるが、〈不可知論〉よりも〈科学的自然主義〉の方が、ハクスリー研究だけでなくヴィクトリア時代を対象とする科学史研究でハクスリーおよび周

辺の科学者が唱道した理念を表すのに用いられている。〈科学的自然主義〉が学術研究の分析概念として定着するきっかけとなった研究が、1974年に出版されたターナーのモノグラフである。ターナーは、〈科学的自然主義〉を定式化した上で、自然主義に基づく科学とも伝統宗教とも異なる、両者の間の道を歩んだ科学者たちに焦点を合わせている。ターナーによれば、〈科学的自然主義〉は、超自然主義を拒絶して経験科学に基づいて自然だけでなく人間と社会を新しく解釈し、科学を武器に社会の世俗化を目指した思想潮流である。キリスト教に代わって科学が社会の中心原理を提供し、聖職者に代わって科学者が社会を牽引することを目指したのである。科学には真理を探究する際の規範が存在するが、〈科学的自然主義〉は真理を科学の研究対象である自然現象と自然法則に限定するという規範を課した。このような科学に飽き足らず、いわゆるスピリチュアルな存在も含めて自然を超える真理を求めた人々が、ターナーの研究が焦点を合わせた科学者たちである (Turner, *Between Science and Religion*)。同時期にターナーは、〈科学的自然主義〉とトマス・カーライルとの関係を考察する論考で、〈科学的自然主義〉を唱道した人物であるハクスリーとジョン・ティンダルがともにカーライルから大きな影響を得ている点を手がかりに、単純な唯物論には留まらない〈科学的自然主義〉の側面にも目を向けている (Turner, "Thomas Carlyle")。また、ゴーワン・ドーソンとライトマンが編集したヴィクトリア時代の〈科学的自然主義〉に関する論集では、制度、科学者集団、世代などの切り口にした論考で〈科学的自然主義〉が分析されている (Dawson and Lightman, *Victorian Scientific Naturalism*)。この論集でもハクスリーは〈科学的自然主義〉を唱道した中心人物として取り上げられており、両者による序文では、ヴィクトリア時代の〈科学的自然主義〉概念とこの数十年の学術研究における分析概念としての〈科学的自然主義〉が概略されている (Dawson and Lightman, Introduction)。〈科学的自然主義〉という理念に基づくハクスリーの活動がヴィクトリア時代社会に与えたインパクトからハクスリーの宗教信仰に迫るというアプローチも可能なのだ。

V ハクスリーの世界観——自然観と人間観

〈科学的自然主義〉が目指した科学の世俗化がキリスト教の世界観に基づく自然神学から自然科学を切り離すことを意味したのであれば、科学の世俗化を支えた新しい世界観とはどのようなものであろうか。このような観点からハクスリーの世界観を探究することでハクスリーの宗教信仰に迫ることもできる。「世界観としてのダーウィニズム」を提唱した科学史家のジョン・C・グリーンは、機械論的自然観、生物進化論、経済学 (political economy)、実証主義 (positivism) からなる「世界観としてのダーウィニズム」を1850年代にスペンサー、ダーウィン、ハクスリー、ウォレスが共有していたと論じている (Greene)。このグリーンの見解が妥当かはともかく、世界観とその各要素を切り口にしてハクスリーの宗教信仰に迫るというアプローチが可能である。

科学によって創り上げられた〈新しい自然〉という観念 (See Turner, *Between Science and*

Religion 8-17) を提起したハクスリーの自然観からハクスリーの世界観を探究することで、ハクスリーの宗教信仰に迫ることもできる。ヴィクトリア時代中期におけるハクスリーの自然観としてハクスリー研究で引き合いに出されてきたのが、1868年に成人教育学校で行われた教養教育 (liberal education) に関する講演で展開されたチェス盤の比喻である。ハクスリーは、チェスのルールを自然法則とみなし、科学者が明らかにした自然法則を学ぶのが教養教育だと論じている。

チェス盤が世界で、駒が宇宙の現象で、ゲームのルールはいわゆる〈自然〉の法則である。相手は隠されていて見えない。わかっているのは、相手の手は常に公平で、公正で、忍耐強いということだ。(Huxley, "Liberal Education" 82)

さて、私が〈教育〉という言葉で意味しているのは、この偉大なゲームのルールを学ぶことである。言い換えれば、教育は、事物とその力だけでなく人間と人間の生き方も包括する〈自然〉の法則を熟知するように指導することである。また、情緒と意志を成形して〈自然〉の法則に従って動きたいという誠実で愛すべき欲望に変えるのも教育である。私にとって、教育が意味するのはこれ以上でもこれ以下でもない。(Huxley, "Liberal Education" 83)

ここで表されている自然は、常にルールに従うフェアな〈自然〉である。この「〈自然〉の法則」を学ぶことで社会における人生も豊かにできるというのがハクスリーの信念だと解釈できる。先に言及した「進化と倫理」の背景を概説するハクスリー論でパラディスは、この講演でハクスリーが自然をチェスの対戦相手である天使に準えて人間に勝つより負ける存在として描いている点に注目している。この講演の時点でも自然は個人に敵対していると留保をつけながらも、天使というポジティブなイメージで〈自然〉を表象している点を晩年の「進化と倫理」におけるずっと悲観的な自然観と対照するのだ。パラディスは晩年の「進化と倫理」までのハクスリーの議論をたどって道徳的な意味をもたない無目的な自然というハクスリー晩年の自然観への歩みを追っている (Paradis, "Victorian Context" 20-22)。このようなハクスリーの自然観がどのように変化したのかという問題に対して J・S・ミルの死後に公刊された自然論の影響も指摘されており (O. Stanley)、パラディスによるハクスリー研究のモノグラフでも、ミルの自然論に言及しながら、自然に道徳的な意味を見いだすロマン主義的な自然観から人間と抗争状態にある無目的な自然という科学的な自然観への移行がたどられている (Paradis, *T. H. Huxley* ch. 4)。チェス盤の比喻で表されたハクスリーの自然観は自然主義化した神義論とみなしうるが (See Moore, "Theodicy")、晩年のハクスリーは、明確に神義論を否定している。ダーウィンが唱えたメカニズムによる進化が進歩を意味しないと、無目的で道徳的な意味を持たない自然という観念に基づいて明確に主張するようになるのだ (T. H. Huxley, "Struggle for Existence")。

このような自然観と結びついていたハクスリーの人間観も、生物進化論の文脈で解釈されてきた。以前から自然神学の文脈で議論されてきた「自然における人間の位置」という論点は、類人猿と人類の身体における類似性を論じた1863年に出版された著書のタイトルになっている (T. H. Huxley, *Man's Place in Nature*)。パラディスは、そのタイトルを副題に付けたモノグラフで、以前から存在する動物としての人間という考え方をヴィクトリア時代の文化に深く刻み込んだと、ハクスリー『自然における人間の位置』を評価している (Paradis, *T. H. Huxley* 115-37)。解剖学の知見に基づいて人間と動物の共通性を強調することで、動物と同じく自然法則に支配された人間という考え方が示唆される。ハクスリーと周辺の科学者が唱えた〈科学的自然主義〉の考えからすれば、人間精神の働きも当然のように自然法則に従った物理現象によって引き起こされると想定されることになる。動物から人間が進化してきたと想定する進化論は、人間性のあらゆる側面が動物から進化してきた自然の属性であるという考えを推し進めることになった。このような自然への一元化を志向する人間観に立脚していたハクスリーが、晩年の「進化と倫理」で〈自然の状態〉と〈人為の状態〉という二面性をもつ〈人間〉を提起したことは、一部の論者に驚きをもって受け止められた (Paradis, "Victorian Context" 42-52)。自然神学が依拠していた〈超自然〉を排除する自然主義を唱道していたハクスリーが、〈超自然〉とつながる精神と自然界に存在する物体という自然神学でも前提にされていた二元論に回帰したように受け取られたからである。この論点は、人間独自の属性と考えられてきた精神性や道徳性が動物から人間に至る自然の進化過程においてどのようなメカニズムで進化してきたのかという進化理論上の大問題と絡んで、進化理論に基づく人間観を分析する際の分かれ目になりうるものであった。

自然主義と進化理論は、伝統的なキリスト教の世界観を動揺させてその見直しを迫り、自然科学を支えるとともに自然科学に支えられる新しい世界観を要請した。ハクスリーの思想や言論活動がどのような世界観に支えられていたのか。ハクスリーの思想や言論活動からどのような世界観が再構成されるのか。ハクスリーの世界観はキリスト教の世界観とどのような関係にあるのか。自然観と人間観を含めてハクスリーの世界観を分析することで、ハクスリーの社会思想・政治思想が拠って立つ土台が明らかになると同時に、ハクスリーの宗教信仰へと近づく道が開けるのである。

VI おわりに

1895年2月からハクスリーは、保守党の政治家で後に首相と外相として歴史に名を残すことになるA・J・バルフォアが同月に出版した著書に対する書評に取り組んでいた。しかし、第一部の校正を終えた後にインフルエンザと気管支炎に苦しめられて長期にわたる療養を余儀なくされた。5月までに病気からは回復し、春から初夏にかけてベランダで日を浴びる生活を送っていたが、原稿を送って校正段階にまで達していた第二部は校正がなされずに出版されないまま、ハク

スリーは同年6月29日に亡くなる（Lightman, “Balfour”）。〈科学的自然主義〉を批判して社会秩序と権威を擁護する保守主義の著作に対する書評という総合雑誌から依頼された仕事を抱えながら亡くなるのは、ハクスリーの人生とキャリアを象徴する最期と言えるかもしれない。ハクスリーは公人としてのキャリアを通じて様々な論客と総合雑誌などで論争を繰り広げてきたからである。晩年に至っても首相を務めた自由党政政治家グラッドストーンなどとキリスト教をめぐる論争を繰り広げ、グラッドストーン批判を含む、宗教や〈不可知論〉をテーマにした論文を1892年に出版された『いくつかの論争点に関する論集』に収めている。このような論争は宗教に関するものも含めてある種の宗教性を帯びた一種の聖戦とみなすことができるかもしれない。宗教信仰は公的な活動の背後にある私的な領域や個人の内面に見いだされると考えることもできるが、上述したようなハクスリーのキャリアを考えると、公人としてのキャリアや言論活動から宗教信仰にアプローチすることもできる。キリスト教会やキリスト教神学など既存の宗教を批判しながら〈不可知論〉や〈科学的自然主義〉を武器に科学界だけでなく社会全体の世俗化を推進して自然科学（者）の専門（職）化を成し遂げたハクスリーについては、特に公人としてのキャリアや言論活動から宗教信仰にアプローチする方法が重要なルートとなるのである。

* 本研究ノートは、2016年11月26日に筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催された日本ヴィクトリア朝文化研究学会第16回全国大会における研究発表「T・H・ハクスリーの宗教信仰」の前半部分を拡充して再構成した文章である。なお、JSPS科研費18K00102「19世紀イギリスにおける教養と一般教育の思想」（基盤C）の助成を受けて拡充した研究である。

参考文献

- Anonymous [Hutton, R. H.]. “Pope Huxley,” *Spectator* 29 Jan. 1870: 135–36.
- Barton, Ruth. “Evolution: The Whitworth Gun in Huxley’s War for the Liberation of Science from Theology.” In *The Wider Domain of Evolutionary Thought*, edited by David Oldroyd and Ian Langham, 261–87. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1983.
- Bowler, Peter J. *Evolution: The History of an Idea*. 25th Anniversary ed. Berkeley: University of California Press, 2009.
- Chadwick, Owen. *The Victorian Church*. 2 vols (Part 1, 3rd ed., 1971; Part 2, 1970). London: Adam & Charles Black, 1970–71.
- Daston, Lorraine, and Peter Galison. *Objectivity*. New York: Zone Books, 2010.
- Dawson, Gowan and Bernard Lightman, Introduction to *Victorian Scientific Naturalism: Community, Identity, Continuity*, 1–24. Chicago: University of Chicago Press, 2014.
- , eds. *Victorian Scientific Naturalism: Community, Identity, Continuity*. Chicago: University of Chicago Press, 2014.
- Desmond, Adrian. *Huxley: Evolution’s High Priest*. London: Michael Joseph, 1997.
- . *Huxley: The Devil’s Disciple*. London: Michael Joseph, 1994.
- . “Huxley, Thomas Henry (1825–1895).” 28 May 2015. *Oxford Dictionary of National Biography*.

- <https://doi.org/10.1093/refodnb/14320>.
- Dixon, Thomas. *Science and Religion: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Greene, John C. "Darwinism as a World View." In *Science, Ideology, and World View: Essays in the History of Evolutionary Ideas*, 128–57. Berkeley: University of California Press, 1981.
- Huxley, Leonard, ed. *Life and Letters of Thomas Henry Huxley*. 2nd ed. 3 vols. London: Macmillan, 1903.
- Huxley Thomas H. "Agnosticism." 1889. In *Science and Christian Tradition*, 209–62. Vol. 5 of *Collected Essays of T. H. Huxley*. 9 vols. London: Macmillan, 1894. Reprint, Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- . "Evolution and Ethics: Prolegomena." 1894. In *Evolution & Ethics and Other Essays*, 1–45. Vol. 9 of *Collected Essays of T. H. Huxley*. 9 vols. London: Macmillan, 1894. Reprint, Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- . *Lay Sermons, Addresses, and Reviews*. London: Macmillan, 1870. Reprint, Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- . "A Liberal Education; and Where to Find It." 1868. In *Science and Education*, 76–110. Vol. 3 of *Collected Essays of T. H. Huxley*. 9 vols. London: Macmillan, 1893. Reprint, Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- . *Man's Place in Nature*. 1863. In *Man's Place in Nature and Other Anthropological Essays*, 1–208. Vol. 7 of *Collected Essays of T. H. Huxley*. 9 vols. London: Macmillan, 1894. Reprint, Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- . Prologue to *Essays upon Some Controverted Questions*, 1–53. London: Macmillan, 1892. Reprint, Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- . "The Struggle for Existence in Human Society." 1888. In *Evolution & Ethics and Other Essays*, 195–236. Vol. 9 of *Collected Essays of T. H. Huxley*. 9 vols. London: Macmillan, 1894. Reprint, Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- Irvine, William. *Apes, Angels, and Victorians: A Joint Biography of Darwin and Huxley*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1955.
- Jensen, J. Vernon. *Thomas Henry Huxley: Communicating for Science*. Newark: University of Delaware Press, 1991.
- Levine, George. "Paradox: The Art of Scientific Naturalism." In *Victorian Scientific Naturalism: Community, Identity, Continuity*, edited by Gowan Dawson and Bernard Lightman, 79–97. Chicago: University of Chicago Press, 2014.
- . "Scientific Discourse as an Alternative to Faith." In *Victorian Faith in Crisis: Essays on Continuity and Change in Nineteenth-Century Religious Belief*, edited by Richard J. Helmstadter and Bernard Lightman, 225–61. Basingstoke: Macmillan, 1990.
- Lightman, Bernard. "Fighting Even with Death": Balfour, Scientific Naturalism, and Thomas Henry Huxley's Final Battle." In *Thomas Henry Huxley's Place in Science and Letters: Centenary Essays*, edited by Alan P. Barr, 323–50. Athens: University of Georgia Press, 1997.
- . *The Origins of Agnosticism: Victorian Unbelief and the Limits of Knowledge*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1987.
- Lucas, J. R. "Wilberforce and Huxley: A Legendary Encounter." *Historical Journal* 22 (1979) : 313–30.
- Moore, James R. *The Post-Darwinian Controversies: A Study of the Protestant Struggle to Come to Terms with Darwin in Great Britain and America 1870–1900*. 1979. Paperback ed. Cambridge: Cambridge

- University Press, 1981.
- . “Theodicy and Society: The Crisis of the Intelligentsia.” In *Victorian Faith in Crisis: Essays on Continuity and Change in Nineteenth-Century Religious Belief*, edited by Richard J. Helmstadter and Bernard Lightman, 153–86. Basingstoke: Macmillan, 1990.
- Paradis, James. “*Evolution and Ethics* in Its Victorian Context.” In *Evolution & Ethics: T. H. Huxley's “Evolution and Ethics”; With New Essays on Its Victorian and Sociobiological Context*, edited by James Paradis and George C. Williams, 3–55. Princeton: Princeton University Press, 1989.
- . *T. H. Huxley: Man's Place in Nature*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1978.
- Stanley, Matthew. *Huxley's Church and Maxwell's Demon: From Theistic Science to Naturalistic Science*. Chicago: University of Chicago Press, 2015.
- . “Where Naturalism and Theism Met: The Uniformity of Nature.” In *Victorian Scientific Naturalism: Community, Identity, Continuity*, edited by Gowan Dawson and Bernard Lightman, 242–62. Chicago: University of Chicago Press, 2014.
- Stanley, Oma. “T. H. Huxley's Treatment of ‘Nature’.” *Journal of the History of Ideas* 18 (1957) : 120–27.
- Turner, Frank Miller. *Between Science and Religion: The Reaction to Scientific Naturalism in Late Victorian England*. New Haven: Yale University Press, 1974.
- . *Contesting Cultural Authority: Essays in Victorian Intellectual Life*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- . “Victorian Scientific Naturalism and Thomas Carlyle.” *Victorian Studies* 18 (1975) : 325–43.
- White, Paul. “Genius in Public and Private.” In *Thomas Henry Huxley's Place in Science and Letters: Centenary Essays*, edited by Alan P. Barr, 213–58. Athens: University of Georgia Press, 1997.
- . *Thomas Huxley: Making the “Man of Science.”* Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

垂水雄二『進化論物語——「進化」をめぐる六人の学者の功罪とその生涯』バジリコ 2018年

